昭和二十六年三月十五日発行（毎月一回十五日発行）・（第二十四号）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

慈光

第三卷・第三號

目次

教行信證総序……（1）
速に生死を離るる道……花田正夫（2）
歎異抄十三章讃仰……福島政雄（7）
大悲心の成就（補遺）……白井成允（13）
「信仰静観録」出版に就て……編者（14）

教行信證總序

愚禿釈親鸞述

ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船、無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり。然れば則ち淨邦縁熟して調達閑世をして逆害を興ぜしめ、淨業礼彰れて、釈迦牟提をして安養を選ばしめたまへり。斯れすなはち、権化の仁、ひとしく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんとおほしてなり。

かるがゆへに知んぬ、圓融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を爲す正智、難信金剛の信樂は疑を除き證を獲しむる眞理なり。

しかれば凡小修し易き眞教、愚鈍往き易き捷径なり。大聖一代の教、是の徳海に如くは無し。穢を捨て淨を忻ひ、行に迷ひ、信に惑ひ、心昏く識寡く、悪重く障多きもの、殊に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、專ら斯の行に奉へ、唯斯の信を崇めよ。

噫、弘誓の強縁は多生にも値ひがたく、眞実の淨信は億劫にも獲がたし。

遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ、若しまた此の廻、疑網に覆蔽せられなばかへりてまた曠劫を逕歴せん。誠なる哉や攝取不捨の眞言、超世希有の正法、聞思して遲慮することなかれ。

爰に愚禿釈の親鸞、慶ばしき哉や、西蕃、月支の聖典、東夏日域の師釈に遇ひ難くして今遇ふことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり。眞宗の教行証を敬信して特に如来の恩徳の深きことを知んぬ、斯を以て聞く所を慶び獲る所を嘆ずるなり矣。

速に生死を離るる道

花田正夫

我々は毎日毎日、よいのわるいの、すきだきらいだ、思ふやうになつたとかならぬとか、さう言ふことばかりに身心をすりけづつてゐるのであるが、省みれば無限の欲求を持つ身で、限りある力しかない者が、無常転変の世に処してゐるのであるから「到る処に愁歎の声をきく」のが我等の定めである。

「生死の苦海ほとりなし」とは、実に覚者の御目に写る我等凡夫の実相である。佛陀はこのことをよくしろし召すが故に、生死出づべき道を御自ら證し給うて、御生涯をとうして夫々の業苦に沈む者や老少善悪のへだてなく救ひ遂げて下されたのであつた。

然し大聖去りましてすでに二千九百年、今日においてその経典は八萬四千と数へられる。佛法の幽玄であり深広であることは現在誰しも認めることであるが、さて何処から入門してよいのか、特に佛教に專念し得る人々なら夫々学び得ることも出来やうが、さう言ふ特別な人達でなく毎日の家業に追ひ廻されてゐる者には全く手も足も出ぬ始末である。多岐亡羊といふ言葉を中学生時代に覚えたが、こと佛法に関しては全くその通りである。ここに法然上人の簡明な指南を掲げて見たいと思ふ。

選択本願念佛集に云く。南無阿彌陀佛、往生之業には念佛を本と爲す、と。

又云く。夫れ速に生死を離れんと欲はば、二種の勝法の中且く聖道門を閣きて、選んで淨土門に入れ。

淨土門に入らんと欲はば、正・雜二行の中、且く諸の雜行を抛てて選んで正行に帰す応し。

正行を修せんと欲はば、正・助二業の中、猶助業を傍にして、選んで正定を專にす応し。

正定之業とは、即ち是れ佛の名を称するなり。名を称すれば、必ず生ずることを得、佛の本願に依るが故なり、と。

（註）「聖道門」とは、聖者の道を実践して今生に成佛をしやうとする道。

「淨土門」とは、今生は佛の本願力に帰して淨土に生れて成佛する道。

「正定之業」とは阿彌陀佛の名を称すること。

「正行」とは彌陀一佛に心を定めて、その経を読み、佛德や淨土を観察し、佛を礼拜し、讃歎供養し、名を称することと。

「助業」とは正行中の称名以外を云ふ。

「雜行」とは正行に入らぬ一切の諸善萬行を言ふ。

已上が法然上人の御生涯を貫ぬいて御提唱下された要諦である。御自身が流罪にあはれても弟子方が死刑に処せられても、それを超えて御勧め下された慈訓である。これによつて山上聖者の佛教、特種人の佛教に当時偏してゐたものが一切道俗の佛教、特に在俗無智の者に佛法の大功德が開放せられたのである。速に生死を離れる道は南無阿彌陀佛の一つと明らかに示されたのである。

然し、かうなるに就いて大切なことがある。それは、道元禪師は「坐禪」の一つを勧められ、日蓮聖人は「題目」の一つを極唱されてゐるので、法然上人が「念佛」の一つと定められるのも、皆規を一つにするであらうと考へられ勝であるが、法然上人が南無阿彌陀佛一つと仰せられる根本は、上人御自身が愚痴の法然、十悪の法然房と常に懺悔せられ、黒白をも知らぬ童子、是非も知らぬ無智の者と常に仰せられてゐる点をよく味はねばならぬ。

一文不知の愚者、罪業深重の悪人、これが佛智に照らされて御信知下された法然上人の御心底である。思ひをここにひそめて、上人の仰せを拜する時、他の師とは自づと異なることが知れる。即ち「聖道門を閣く」とか「雜行を抛てる」とか「助業を傍にする」と仰せられたのは、御自身が実行せられずに言はれたのではない。御年十五から台嶺に登られて、一筋に生死出づべき道を求め歩まれたのであるが、如何にせん一切経を五遍も熟読されながらも「経典を披覽するに、其智最愚なり。行法を修習するに、其心かへつてくらし。法は深妙なりといへども、我が機すべて及び難し」と四十三歳に於て萬事窮されたのである。絶対絶命に立たれたのである。奈良や叡山に智者、学者、德者も訪はれたが、聞けども聞けども上人の胸に一点の光ともならぬ。路傍に耕作する人或は商ひする人を眺められては、自分は法衣を着して三十五年、佛道一つを求めて来ながら、実のところさつぱりわからない、あらゆる行も皆崩れてしまふ身、佛とも法とも知らぬ市井の野人とちつとも変り目のない身を自覚せられては暗涙にむせばれたことであらう。

茲に「善因たちまちに熟し、宿縁とみに顯れ」て、善導大師の観経の疏を読まれ「末代造悪の凡夫、出離生死の旨」を知られるに及び、随喜の餘り身の毛もよだつて、吸ひ着けられ、魅せられたやうに八遍も繰り返し読まれた最后「一心專念彌陀名号　順彼佛願故」の文に至つて忽然として左意を得られ、覚えず知らずあたりに聞く人もないのに「予が如き下機の行法は、阿彌陀佛の法藏因位の昔かねて定めおかるるをや」と高声に唱へられて、感悅髓に徹り落涙千行であつた。

茲に上人は一切善悪の凡夫が速に生死を離るる道は、阿彌陀佛因位の昔からかねて定めおかれた「南無阿彌陀佛の一つ」と決定されたのである。選択攝取せられた念佛に氣づかれたのである。これはこちらが定めたのでなく佛が定め給うてゐられたのである。

親鸞聖人も亦二十年の修学修行の結果「いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみ家ぞかし」となられて吉水の法然上人の門を問はれて「親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとの仰せをかぶりて信ずる外に別に子細なきなり」と、選択本願の念佛を「ただ、子細なきなり」と信順され「地獄におちたりとも後悔すべからず候」とまで仰せられてゐる。

さて再び法然上人の御勧化を頂くに、上人が「閣き、抛て、傍に」ときはどく仰せられたのは、そのことが善いとか悪いとか言はれたのではなく、いづれも勝法であるが一文無知の愚者、一生造悪の痴人の自分には手のとどかぬ道である、この愚悪の凡夫には、かねて佛が、よくそのことを知ろし召されて、その者をこそ救ひ遂げずばおくまいと悲心こりて長時不断の火と燃えて、選びに択ばれた慈悲の至極の南無阿彌陀佛の御廻向ばかりである。して見れば「他力の悲願南無阿彌陀佛はかくの如き愚痴のわれらが爲なりけり」と信順申すばかりである。

「正定之業とは、即ち是れ佛の名を称するなり。名を称すれば、必ず生ずることを得、佛の本願に依るが故なり」と仰せられてゐるのが上人勧化の眼目である。そこ一つを頂けば願はず求めないのに本願力自然の御はからひによつて、速に生死を離れる道が成ぜられる。

扨て、兩聖人が御自身の御体験の上から、然も御自ら、愚痴、愚秀の身と懺悔せられての上に、かかるあさましき身の生死を離れさせて下さる道は「本願の念佛一つ」と御示し下されてゐることは前述の通りであるが、その御指南にあづかつて、自力聖道の門は心も言葉も及びもつかぬことであると知らされ、更に萬行諸善も相対五分五分の善しか出来ない、相手の出方一つで皆崩れて悪い方へ悪い方へと沈む外はない虚仮の身と知らされ、最早かかる身には「念佛一つ」とまで引入せしめられてゐる、所謂、專修念佛者の中において、間違ひ易い、それがために無限の焦慮と不安を念佛申し乍らも繰り返さねばならぬことがある。そこを底を叩いて徹底的に示されてゐるのが歎異抄である。

歎異抄とは「先師口伝の眞信に異る」を歎き悲しむのあまり泣く泣く筆を染められたものである。然も相手はすでに念佛申して居る人々であり乍ら本願の意趣をとりちがへて居る人々に対しての書である。「信心一つ」ならぬ者への切々哀々たる悲心の書である。

扨て異義を大別して二つとなる。智の上では独断と無定見であり、情意の上では横着心と遠慮心である。その共通な点は自己中心主義である。ここのところをまことにこまごまと明らかに近角先生が信界建現誌上に記されてゐられるから引用させて頂く。

〃如来が彼の因を建立したまへることを了知すると、了知すゝ能はぬとが、眞実と権仮との区別である。絶対信と相対信との分岐点である。即ち信疑の得失、信仰の徹底と不徹底の追分である。

彼の因を建立したまへるとは唯一の念佛を選択したまへる願心を了知することである。

ここを了解し安くするために俗なる譬喩を取らば、恰も親が病兒の爲に粥を作りて與ふるが如くである。乱暴なる小供の爲に母親が丈夫なる手織の着物をこしらへて呉れたるが如くである。

まづい粥なりと考へていやいやながら義務的に喰うて居るは横着者である。なんでもない粗衣であると思うて軽蔑して着て居るは放縦主義である。是が親が自分の爲に態々作りて呉れた親心を了解せざるものである。

これと反対に、親が汝の病氣のために悩めるを憐みて作りたる粥なり、汝に適する様に態々織りたる着物なりと聞くや、却つて恐れ入りて、着物を汚さんことを恐れ、粥を尊みて之を口にせざる者あらば如何。これあまり遠慮主義、律法主義に陥りて、却つて親心を了解せざる者である。

乱暴ものの爲に着安き様にとて態々作りたる親心を了解せば、煩悩の汗や汚れを氣にせずに「他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」と了知するが徹底したる信心である。

病氣の小供が、喰ひ安き様に作り呉れたる親心を了知せば「煩悩具足の我等はいづれの行にても生死を離るることあるべからざるを憐み給ひて、願をおこしたまふ本意、悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり」是れ彼の因を建立したまへるを了知するのである。

天災地変の時、給配品や救助品を当然のことと思ひて軽々に受くるは、横着に流れて、彼の因を建立し給へるを了知せぬのである。

又一旦其多大の厚志を聞くに及びて、恐縮して代価の払ひ得ざるを恐れ、報謝の出来難きを歎いて、之を遠慮し辞退せんとするは、是れ亦彼の因を建立したまへるを了知せざるものである。

汝代価を払ひ得べくば他の売店につきて買求めて可なり。報謝を要すべくは何ぞ救助するの要あらん。救助はむしろ代価を払ひ得ざる者の爲なり。報謝をなし得る程ならば救助せざるなり。是れ即ち「天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思ひ給ふべきなり」喜び得るならば却つて往生は不定である。佛はかねてしろし召して煩悩具足の凡夫と仰せられたることゆへに、喜び得るならば煩悩のなきやらんと怪しい。

彼の因を建立したまふことを了知せられたる聖人の告白が常の御述懐たる「彌陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたぢけなさよ」是れである。〃

誠に近角先生が横着心や遠慮心に堕する我々に嚙んで含めるやうに、抱いてかかへて下さるやうに、くだきこなされて、選択本願の念佛の本意を御訓へ下さつた一節である。

如来選択の本願の念佛は、自己の悪を辯護する道具でもなく、それによつて自己の人格を完成さす爲でもない。それ等は皆自己が生きるための念佛である。選択廻向の南無阿彌陀佛は、進みもならず退きもならずとどまることも出来ぬ、生きてゆく力の絶えてない者のための悲願であり、粥であり、手織の着物である。ここに生きる力の絶えてない私の爲の本願であり念佛でましますと了知させて下さるのである。代価も払ひ得ず、報謝さへ出来ない私のために「たすけんと思召し立ちける本願のかたぢけなさ」がある。

蛇足ながら実話を附加しやう。十五年も前からしきりに信仰談を聞いて下さる娘さんがあつた。段々と家庭の事情を聞いて見ると「自分は一番末の子であるが、姉さんが嫁いで数年経つても小供が出来ないので、養女として姉の家に入つたが、数年後に女子と男子が生れたので、自分は不要の者となつた。そこで独立するか嫁入りするかに定めねばならぬが兄夫婦が許して呉れない。そこで家庭が面白くないので信仰の話をきくやうになつた」とのことであつた。ところが終戦後になつて戦災やら食糧難やらが続き、義妹や義弟も大きくなるにつれて家庭のゴタゴタが激しくなつた頃、長文の手紙で苦衷を告白され、今迄は信仰談や念佛の本を読むとすこしは胸が樂になり明るくなつたが、最近ではすつかり駄目になり、朝夕の礼拝にも念佛も出なくなつた。もうこの上は自殺するか、家出する外はないとのことであつた。

そこで私は早速家を訪ねて「貴女は念佛とか信仰とかによつて行き詰つた胸をおさめやう、よくならうとばかりにかかり果てゝゐられるが、念佛はさうしたものではない。よくならう、よくしやうとどんなに願ひ求めても何かの問題ですぐ崩れて駄目になつてしまふ、愚痴もやまず、腹立ちもやまず、

距て心もとれぬ、否段々と悪の方へ落ちて行くより外ない者をこそ阿彌陀佛ばかりが可愛想と見てとつて下さつての本願であり念佛です」と申すと、非常に驚かれて、「ああさうでしたか。この駄目な私なればこその念佛でしたか」としきりに念佛に帰られた娘さんがある。これが生きるための念佛から、生きる力のたえてない者の爲の念佛と転ぜられた好い例と思ふ。ここに「障り多きに徳多き」無碍の一道がひらかれる、是れ信界から建現する一切の基盤である。

歎異抄仰讃

福島政雄

今晩は歎異抄の十三章を讃仰申す積りでありますが、先ず一応原文を読みませう。

「彌陀の本願不思議におはしませばとて悪をおそれざるは「また本願ほこりとて往生かなふべからず」といふこと、この條本願を疑ふ、善悪の宿業を心得ざるなり。善き心のおこるも宿業の催す故なり、悪事の思はれせらるるも悪業の計ふゆゑなり。故聖人の仰には「兎毛・羊毛のさきにゐる塵ばかりも造る罪の宿業にあらずといふことなしと知るべし」と候ひき。

又あるとき「唯圓房は我がいふことをば信ずるか」と仰の候ひしあひだ、さんさふらふと申しさふらひしかば「さらば我が言はんこと違ふまじきか」と　かさねて仰の候ひしあひだ、つつしんで領狀申して候ひしかば「たとへば人千人殺してんや、しからば往生は一定すべし」と仰せ候ひしとき「仰にては候へども一人もこの身の器量にては殺しつべしともおぼえず候」と申して候ひしかば、「さてはいかに親鸞がいふことを違ふまじきとは言ふぞ」と。「これにて知るべし、何事も心にまかせたることならば、往生の爲に千人殺せといはんにすなはち殺すべし、然れども一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり、我が心の善くて殺さぬにはあらず、また害せじと思ふとも百人千人を殺すこともあるべし」と仰の候ひしは、我等が心の善きをば「よし」と思ひ、悪しきことをば「あし」と思ひて「本願の不思議にて助けたまふ」といふことを知らざることを仰の候ひしなり。

そのかみ邪見におちたる人あて「悪を造りたる者をたすけんといふ願にてましませば」とてわざと好みて悪を造りて「往生の業とすべき」よしを言ひて、やうやうに悪様なることの

きこえて候ひしとき、御消息に「藥あればとて毒をこのむべからず」とこそ遊ばされて候ふはかの邪執を止めんがためなり、またく「悪は往生の障たるべし」とにはあらず。持戒持律にてのみ　本願を信ずべくば　我等いかでか生死を離るべきや、かかる浅ましき身も本願にあひ奉りてこそけに誇られ候へ。さればとて身に備へざらん悪業はよも造られ候はじものを、また「海河に網をひき鈎をして世を渡る者も野山に猪を狩り鳥を捕りて命を繋ぐ輩も商をし田畠を作りて過ぐる人もただ同じことなり、さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべし」とこそ聖人は仰せ候ひしに、当時は後世者ぶりして善からん者ばかり念佛申すべきやうに思ひ、或は道場に張文をして「何々の事したらん者をば道場へ入るべからず」なんどいふ事、ひとへに賢善精進の相を外に示して内には虚仮をいだけるものか。願に誇りて造らん罪も宿業の催す故なり、されば善きことも悪しきことも業報にさしまかせて偏に本願をたのみまゐらすればこそ他力にては候へ。唯信鈔にも「彌陀いかばかりの力ましますと知りてか罪業の身なれば救はれ難しと思ふべき」と候ぞかし。本願にほこる心のあらんにつけてこそ他力をたのむ信心も決定しぬべきことにて候へ。凡そ悪業煩悩を断じ尽して後本願を信ぜんのみぞ願に誇る思もなくてよかるべきに、煩悩を断じなばすなはち佛なり、佛のためには五劫思惟の願その詮なくやましまさん。本願ほこりと誡めらるる人々も煩悩不淨具足せられて候ふけなれ、それは願にほこらるるに非ずや、いかなる悪を本願ほこりといふ、如何なる悪かほこらぬにて候べきぞや、かへりて心をさなきことか。

この章の初めの問題は宿業であります。業と言ふ言葉は私の感じでは、非常に暗い感じをうけます。私自身も暗い感じにおちますと業を思ひます。業にならんで縁といふ言葉がありますが、縁といへば明るい感じをおこします。

従前からもさう思つてゐましたが、特に此の頃感じますことは、佛法がわかるやうになり、段々と深くなつて行く人は、よくよく深い業のある人だと、さういふことを自分の上から感じて居ります。

世間を軽く愉快に渡る人は多いのですが、私はさう行きません。色々のことが身辺におこり、又自分自身の煩悩の問題がありまして、そこに業の深さを感じます。

本章の聖人と唯円房の御対話の中の「たとへば人を千人殺してんや云々」とありますが、これに近角先生が註を加へてゐられますやうに、聖人は指鬘外道のことを考へられ乍ら仰せられてゐると思ふ。「千人の人を殺し指を切つて首輪にすれば道を得られる」との邪心ある師の陥穽に落ちて九百九十九人を殺し、最後に佛に遭ひ、転じて救はれて行つた。この故事にちなんで聖人が語られたのでありますが、この指鬘外道を思ひます時、九百九十九人殺した指鬘の悪は明るい悪さである。大ぴらに人殺しをやつてゐる。人殺しは悪いが正面か

ら振りかざして人を殺して指をとるといふのですから悪をやりながらも明るさを持つてゐる。

私の業は明るいものでない、何とも言へぬ暗いものである。然し暗いものであるが、明るさうな色彩をつけて、暗いものを暗いと感じないで、浮調子なローマン氣分ですごすことはしばしばあるが、併し暗さを持つ悪業である。だから自分の悪業に自分が悪いと感ずるやうになると、何とも言へぬ沈み方となる。然し沈んだ時がよいのでもなく、浮調子の時がよいのでもない。「自分の様な業の深いつまらぬ奴」と感じてゐる時は反省もしてゐてよささうであるが、実は本当に反省してゐるのではない。「しまつた、世間の問題になつたらどうしやう」などが常につきまとうて沈んで来るので、眞の反省ではない。浮調子の時はローマン氣分になつてゐる時で、私は常に沈んだり、浮調子になつたりを何時も繰り返してゐます。

私は佛法を聞き始めた頃、罪悪感とか煩悩とかいふことに痛切な感を起すやうになつた。忘れられない事ですが二十七歳の三月十一日の夜であります。大無量寿経の五悪段の第五の悪のところを御佛前で読んでゐた。――其頃丁度結婚問題で親を苦しめてゐた時で、母がはるかに遠い熊本から東京まで心配して来た時でした。――その時五悪段の第五の悪の初めの段で「家事になまけて精を出さず、親がいましめると、親に眼をいからして口ごたへをするのは親子でありながら仇同志のやうで、子なきにしかず、云云」とあるのを読み、これは私のことを述べてあると氣付き、御佛前につい泣き伏してしまつた。

これが私の記憶した限り、佛法を聞き始めてから、自分の煩悩悪業に氣づき始めたはじまりです。法の深信、機の深信、機法一体といつて二つは分けられぬのですが、私は二十六歳の七月十一日の夕方から法の深信が意識の上にあらはれ、機の深信を意識の上で感じ出したのは、二十七歳の三月十一日で、意識の上では離ればなれに出ました。然しこれは当然のことで機の深信は法の深信の上から出る。五悪を自分のことと感じ始めたのも、法の深信、佛陀の無限の智慧の光によつて見せしめられたのであります。自己の反省によつて見えたものではないと、かう感じて居ります。

然しなかなか自分はしぶといもので、この時感じ始めましても、何時も佛の光をうけてあさましいと感じつづけてゐるかといへばさうでない。自分の悪業煩悩に理屈をつけて、霞の奥においてごまかして見てゐる。自分の悪業の姿を一貫して感じつづけず、佛の前におそれ入るといふことが続いてゐません。常にぬりかくさうとしてゐる。自分に悪業があつても、それをごまかして、自分は矢張りよい所があると考へずには居られない、全く自分は輪に輪をかけたこまつた存在であります。指鬘外道は性(タチ)のよい悪人であると思ひます。自分は全く性の悪い悪人で、自分で本当には悪人と思へぬ悪人です。

私が三十七八の頃ベルリンで一年半過しましたが、下宿してゐた家の五十格好の奥さんと或る時話のついでに「私は悪魔のやうなものです」と言つたら、「それは独逸では、〃魚を

釣る〃意味の言葉といふのです。自分が悪魔と言ふのは、いやさうではない、よい人間ですと言はれ度いのでせう」と虚を衝かれてこまつてしまひました。口ではあさましい悪人と言ひますが「その通りだ悪人だあさましい奴だ」と言はれると、少々あてが違つたといふ感じがしてさうではないと思ひます。悪魔といつても輪のかかつたもので、或る時は痛切に感じても、すぐに辯解して息みません。これが今一歩脱線すると「煩悩も大切なものだ」と言ふ心になります。私も西洋から帰つた頃その傾向が特にひどかつたやうです。西洋の自由主義の半面には煩悩肯定の傾向が強いので、私はその風に染んで帰国いたしまして近角先生をお訪ねしてさうしたことを申しましたら「どうも西洋から帰つたものはさうした氣分になり易い」とひどく叱られたことがありました。知らず知らずに西洋の氣風がしみついてゐたのであります。

極端に行けば煩悩肯定主義、放縦主義になつて、自分の育てられた善知識にさへ切り込む心にまでなります。ですから単純に自分の悪業をすなほに認めて、おそれ入つて、つつましやかな念佛生活を送るといふ風ではありません。尠くとも私はさうなのです。指鬘外道が私に比べてあかるい悪人だとはさうしたところから申すのであります。

然しこの條の初めの聖人の御言葉

「よきこころのおこるも、宿善のもよほすゆへなり。悪事のおもはれせらるるも、悪業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには、卯毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき」

は全く水も漏らさぬ御言葉であります。然しこれをうつかり読むと運命論や宿命論と感じますが、その区別は運命観や宿命観は「自分はそのことにあづかつてゐないのに、或る外部の力が自分を強ひてさうさせられた」といふ点があり、宿業観はさうでなく、成る程外からの力が働きかけてはゐるが、自分自身が働いて来た果をうけてゐるのが中心で、外部の力は援助したばかりであり、実は自業自得で、自己の過去の業が中心となつてゐる。佛教の宿業感はかうしたものと感じてゐます。

この感から申しますと聖人のこの御言葉は水一滴も漏らさぬところがあり、私の逃げ場がなくなる感がいたします。そこに自分の宿業や業果に対する自己の態度が問題となります。

私自身のことを申しますと、一昨年から昨年にかけて私自身はさんざんの有様でありました。追放によつて職に就かれなくなつてゐたのも相当に苦しかつた問題であります。また私の望をかけてゐる次男が一昨年から大分長い間病氣になつてゐる。昨年の夏には二十六歳の娘が死にました。私の三人の娘の中で、私と妻とのよい相談相手になり、力になつて呉れて居りました娘であります。男の子は四人居りますが、私の学問をつぐといふ望みをかけてゐる子が長い病氣の狀態にあります。女の子も四人でしたが長女は三十余年前に四歳で死に、二十六歳になつた娘が昨年夏なくなりました。

斯うした中に男の子を眺めましても、女の子を眺めましても、家の中は先が暗くどうなることかといふ感を持ちます。これが私の宿業の問題であり、そこに愚痴がおこり「自分はどうしてかう言ふことが続くのであらうか、それ程までの悪人ではないのに」といふ感じもおこつて、宿命論、運命論に傾き易いのですが、然し心が静かに落ち着いて、前晩の眠りのよい時などは「いやかういふことを喚びおこした原因は自分の今迄の業、生活の上の、家庭における自分の有様にあるやうである」とまづ思ひます。はつきり自業自得とまでは思へませんが、「この根本の原因が自分に在るやうだ」と心の落着いた時には思へます。そこに私の宿業が問題となります。

然しそれだけでは自暴自棄になるばかりです。一昨年の三四月頃は、自分は死んでしまつては悪いのかと大分考へました。それを此頃妻に話しましたら大変に怒つて「あなた一人死んで楽をしやうとするのですか」と申しました。尤も私も一昨年の秋頃から矢張り生きねばならぬと思ふやうになりましたが、ドン底の家庭の暗さに落ち、人生に絶望して生きてゐる、生き甲斐がない、さうなつて、一度は煩悩で眞暗となり、そのうちに念佛申すやうになる。ドン底に落ちて苦しみもがいてフトお念佛が浮ぶ、何となく佛陀の「御まこと」が身にしみる、そこでホットしてゐる、さう言ふ有様であります。

「されば、よきこともあしきことも、業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまゐらすればこそ、他力にてはさふらへ」

今の私にはここが身に染んでひびきます。

「唯信鈔にも、彌陀如何ばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なれば、すくはれ難しとおもふべきとさふらふぞかし云々」

ここは從前から深く感じてゐるところでありました。今のやうに自分の問題、家庭の問題に苦しみ、悶える、その底から念佛の光がさして下さる。生きた「まこと」を我が身にうける。絶体絶命で眞暗になり、人生に、家庭に、希望に絶対の暗になつた私をよく見拔き、何処何処までも見捨てぬ御慈悲のかたまり、さう言ふまことの生命が私に通うて下さる、それで殆んど絶望的の私がホットして生きてゐる。だから私は信仰があるから如何なる人生にも明るく生きて行きますとは言へぬ。駄目になる私を無限の悲しみを以つて包んで下さる広大な佛陀の生命にふれてゐる、そこにお念佛が浮ぶ、そこでやつと生かされてゐます。

私が二十六歳の時の心機転換の時から十年程の間は、人生如何なることも信仰で、難なく解決して行ける氣持でゐました。その頃は近角先生の仰せを口眞似してしきりに人に説き、時々は信仰の押し売をしたもので、人様から「大変に佛教に御熱心のやうです」とお世辞を言はれると早速御説教を始めてその人に御迷惑をかけたものです。

それが次から次へと現実の問題にブツツかつて、親が死に、妹が死ぬ等の愛別離苦の問題、自分の煩悩の問題、ことに私

は女に迷ひ易いので幾度かつまづきました。このやうに現実問題につまづくと、自分は「信仰の上から立派に解決つけ得る」と思つたのが、そこで突きあたります。四十歳、五十歳となるにつれて自分は立派な信仰があるなどと言へないといふ心持が勝つて来ました。

近角先生は熱のかたまりのやうな信仰心を持たれた方で私などは生温くてたまらなかつたと想像してゐますが、先生はよく私の弱点を見拔いて「女に法を説くときは、場合によつては足で女を蹴つてしまへ」と言はれました。母もさうでありましたが、先生はこの私の弱点をことに御心配下されたやうに思ひます。とに角人生の不如意、即ち自分の煩悩の不如意から現実の色々の躓きがつづき、信仰があるなどと言へなくなり、そこに自分の宿業といふことが大きな問題となりました。第十三章は読み始めました頃から感銘をうけてゐますが、前述のやうに宿業を痛切に感じますと、十三章の親しみが身に染んで増して参ります。その業に伴つて、縁、業は暗く、縁は明るい、この業縁が私の上に生きて感ぜられます。即ち自分の業が深い、その深い業に限りない佛縁が感ぜられて参ります。

佛法に近よる人はよくよく業の深い者です。自分のやうに業の深い者は、聖人の道より外生きて行く道がない。業が深ければ深い程、それをよく理解して下され、見透して下され、深刻な業に苦しむ私を、その業に応ずる深さを以つて慰めて下さる、そこに「業縁」といふ感じをよく味ふことであります。

これが十三章の私の味ひです。逐語的に申せば色々と申すこともありませうが、まづざつと、これだけに致しておきます。

波岡茂輝氏遺詠

念佛の行者は今し遷されていゆくそのさま人々も見よ

一人あらば二人と思へと訓へたまふ祖師の御言葉尊きろかも

古の聖はなべて時の世に容れられざりき寂しかりけむ

一しきり朝毎香を供へたる彌陀をこのごろおろがみまつらず

み佛に香をさゝげて久々に別れし吾にあへる心地す

燈火の数ませばとて日輪の光に光りそふべくもなし

天地に春は来にけり吾が下駄の蹴飛ばす石にもしたしみをもつ

鳥籠ゆこぼれし稗を拾ひつゝ雪のさ庭に雀おり立つ

飼はれたる小鳥うたへり籠の外のこぼれ餌あさる鳥もうたへり

大悲心の成就（補遺）

白井成允

本誌前号にのせていただいた大悲心の成就の一文すこし云ひ足りない辺を覚えてゐましたので、其れを此に補はせていただきます。あの文を稿して花田法兄に送つた数日の後私は足利淨圓先生からおたよりをたまはりました、其の中に

頂上を忘れて登る不死の山

といふ句が記されてありました。先生の深い御法味をおつけ下された御語と親ひますが、其の中に私の前の文で言ひのこされた辺が極めて明らかに言ひ表はされてあるやうに思はれますので、其れを述べさせて頂きます。

富士の山に登る、頂上に達するのが登り始めの第一歩からの念願である。然し登りつゝゆく一歩一歩には頂上は忘れられてゐる。この道をゆけば必ず頂上に達し得るといふ安心に満たされてもう頂上の事はさつぱり心にかゝらない、ただ此の一筋の道を歩むばかりである。其れは不死の山を登り、不死の道を行くのである、生死を超えて念佛をたまはつた如来の本願におまかせまうすのである。

「念佛はまことに淨土に生まるゝ因にてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、勉じてもて存知せざるなり」この道が頂上へ導くのか深い林へでも迷ひ込ますのか、私の思慮分別でいくら考へ計らうてみてもとても知られる事ではない、それを知つたかふりをしてあけつらうてゐるのはもつてのほかのことである。ただ私はこの山を登る先達であられる法然上人の御語にまかせるのみである。上人につれられてどんな深い林に迷ひこんだつて大丈夫である。お念佛のひゞくところ如来の本願が聞こえる。本願の聞こえるところ生死はすでに離れられてゐる、尽十方無碍の光明が照つてゐる。其の中に安んじてこの世の御縁を尽くさせていただくだけである。

お念佛の中には地獄の恐れは既に消えてしまつてゐる。同時に此の世を離れて迅く極樂に生まれねばならないといふやうな妄念も根を絶たれてゐる。もとより私達は生くる限り妄念妄想を離れ得ず、四六時中地獄に堕つる業を積んでゐる。お念佛が之を照らし顕はしてくださる。お念佛の中に其等が如何にしつこくはけしいものであるかが感ぜしめられる。而もそれが如何にしつこくてもはけしくても必ず之を融かし尽くして往生淨土の無碍の一道と転ぜしめてくださるのが念佛であらせられる「たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらす」のである。

「頂上を忘れて登る」といはれる忘れるの味はひがそのまゝ「不死の山」の不生不死に通ふのであらう。このたふとい一句を味はせていただきながら私の前の文を補はせていただきました。

（二月十二日）

故譽田豊吉先生著「信仰靜観録」出版に就て

編者

福岡市藥院大坪町三八の渡辺一郎氏から書信を頂き、故譽田豊吉先生の御著書が、先生三十三回忌に刊行された由を承り、著書の到着をお待ちしてゐましたところ昨日到着、一氣呵成に読了させて頂き、早速読者諸氏に御照会申す次第であります。先生は明治の晩年から大正の前期にかけて福岡師範に在職せられ四十七歳の壯年で往生遊ばされた方でありますが、深く絶対他力の信仰に徹せられて教育者として大いなる感化を與へられ、哲学と倫理には特に深い御造詣のあつた方であります。

先生御逝去後九年の時、渡辺氏と有田広氏との御努力で正続聞思録が刊行されたのであります。故近角先生も「幸に本書の存するは君の信念を千載の末に伝ふるものと謂ふべきである」と序文に御誌し下さいました由であります。今回三十三回忌に新しく御遺稿が世に出ましたことは「眞実は必ず顕現する」ことを明らかに示して下さいました。現実世相から推して渡辺氏の御腐心に敬意を表しますと共に靜観録中から一頂を引用させて頂いて御推薦に代へます。頒価四十円、送料六円、申込先、前記渡辺一郎氏宛、一応御問合せの上送金下さい。

感化の根源

感化の根源は佛の慈悲にある。佛の慈悲を知らない以前の凡ての学問修養は、皆生命のない形骸である。我身は罪悪の塊である。我等自己の力では人を教育し感化することは出来ない。仮令多少賢愚の差異はあるも、何れにしても不完全な人間同志ですることは畢竟五十歩百歩である。若し我等にして人を感化し得べしと思はば、それは我が身知らずの甚だしいものである。若し自己の技術や学問や德望を以て、人を感化しやうと企てたら必ず失敗に終るだらう。我等は、我も佛の慈悲を信じ人にも之を信ぜしめやうと図るべきである。この信念より出づる事柄は、凡て無理のところなく、自ら人を感ぜしむる。自分の我慢によつて、どうして人を感ぜしむることが出来やう、況んや虚偽権謀術策を以てするをやである。

水は自ら其濕へるを知らずして他を濕し、火は自ら其の熱きを覚らずして他を焼くやうに眞実の慈悲は慈悲を忘れる、古い人の言つたやうに眞実の教化は教化を忘れたるところに現はれる。

編集後記

陽柳の新緑目に滲みてうれしい春となりました。慈光誌も満二年となり第二十四号を御送り出来ますことは有り難くうれしい限りであります。ここに改めて御寄稿下された諸先生方を始め絶大な御後援を頂きました諸大士諸法姉方に深く御礼を申し上げます。門外不出の外ない病閑人の私といたしましては唯一の恵まれました仕事を頂いて今後も出来る限りの努力をさせて頂きますが、皆様方の御氣付の点は色々と御叱声を願います。

生かされてゆくばかりなり仏の
　ひろきちかひのあるにまかせて
生かされてゆく道一つひらかれぬ
　生くべきちからたえてなければ

◇

「歎異抄讃仰」は福島先生が一道会館に御來講下さつた時の速記であります。先生に御訂正願つた時、「充分に意を盡くしてはゐないが」との事でありましたが頂きました。先生とされましては一昨年以來、御令息様の御病氣やら御息女様の御逝去、ならびに追放等のあらゆる不如意の御中に愈々本願のたのもしさを味到下されての一言一句ただ深く胸に滲み徹ることであります。

ひは暮れて道とほけれど御佛の
　久遠のひかりわれをてらすも

斯の道やたれか辿りし遠しろく
　ひかりみなぎる永劫の道
おなじ世に同じ佛のむねに生くる
　久遠の友を恋ひてさすらふ

以上は御泊り下された時頂いた御歌です。

○

「大悲心の成就」は白井先生から前号の補遺として頂きました。祖師聖人の八十八歳の御著、自然法爾章の後記を思ひ合せられます「よしあしの文字を知らぬ人はみなまことのこころなりけるを、善悪の二字知り顔は、大そらごとのかたちなり。是非しらず邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり」と、全く「義なきを義とす」に御立ち下さる御満悦の御相を拜する次第です。

○

曇田先生の信仰聲録の御原稿文に、礼と思ひながら直接原文を頂きましたのも御わび申し上げますが、御手に入らぬ方もあらうかと思い引用させて頂きました。

○

「速に生死を離るる道」は法然聖人の御指南南無阿彌陀佛の御心を頂き、一文不知の愚者、罪悪深重の悪人の私のために御提唱下されてゐることを感佩申すと共に、斯るあさましい者に「速に生死を離るる道」を栞して下されたことの有り難さを述べさせて頂きました。

○

執筆者御住所紹介

福島政雄先生・横須賀市田浦局区内谷戸六六二。

白井成允先生・広島縣坂局区内横浜

―花田記―

昭和二十六年三月十日印刷
昭和二十六年三月十五日発行
毎月一回十五日発行
定価　一部金拾五円（郵税共）
　　一年分金百八拾円（郵税共）
名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集兼発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千草印刷所
名古屋市南区駅上町二ノ二八
一道会館
発行所　慈光社
振替口座番号　名古屋一〇四七〇番